

Glocal Tenri



6

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.24 No.6 June 2023

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

・巻頭言

教祖の「神がかり」

／井上 昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」(7)

明治20年10月の「おさしづ」

／深谷 耕治 2

・音のちから—中国古代の人と音楽 (14)

出土楽器が語る音の世界—^{けん}壠—

／中 純子 3

・ヴァチカン便り (62)

法王は4日間入院

／山口 英雄 4

・ニューヨーク通信 (16)

ニューヨークセンターに集う人たち

／福井 陽一 5

・思案・試案・私案

「碍」の字表記問題再考 (25)

仏教にみる障害者像

／八木 三郎 6

・おやさと研究所ニュース 7

2022年度おやさと研究所特別講座
「教学と現代」『元の理』を描く」
報告(金子 昭)／第356回研究報告
会／2023年度公開教学講座のご
案内／2022年度「教学と現代」／
2022年度公開教学講座のご案内

巻頭言

教祖の「神がかり」

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

天理教研究においては多くの「教外」の宗教研究者による研究がなされてきているが、それらの研究を研究対象とするメタ天理教学的な研究は全くなされていない。「教外」研究者の研究に対して単なる護教論的な反論ではなく、認識論的問題に関連づけた議論が天理教学者の側からなされていないのである。

信仰者と研究者の間に生じる問題について検討するためには、「教外」研究者の研究に見るディスコースを分析することが有効である。ある事例(研究論文の抜粋)を紹介したい。教祖の「神がかり」⁽¹⁾について言及している記述である。

もし善兵衛がみきの要求を、どこまでも拒み続けたらどうなただろうか。おそらく、みきは一しきり苦しんだ末に、民俗<宗教>の通常のパターンに復帰せざるをえなかっただろう。あきらめてひき返すということも、なお可能だったのだ。みきにとってはそれがより幸せであったかもしれない。心の奥ではそれを望んでいたかもしれない。みきの神の要求を蹴ることが、みきを守ることだったかもしれない。しかし事態はそう進まなかった。善兵衛は、けっして強く家を守るという意志を貫こうとしなかった。善兵衛はみきを見捨てたとさえいえよう。それもまた、善兵衛とみきの関係のあり方の運命的帰結だったと言ふべきだろうか。善兵衛が承諾してしまったことによって、奇妙な事態が生じた。みきは「神に貰い受けられる」ことになった。退路が断たれてしまったのだ。著者の声があまりにも支配的な「著者

版教祖伝」と呼んでよい今や古典となったこの論文において、そのタイトルに「神がかり」という言葉があるにも関わらず、神がかりなどなかったかのような描写が

見られるのは興味深い。

ここで問うべきは、このような(天理教を信仰していない)「教外」研究者の解釈に対して(天理教を信仰する)天理教学者はどのような立ち位置を取ることができるのかという問題である。これらの解釈に対して一信者の取る態度は比較的明快なものだ。「彼は親神の存在を信じていない。」とか「月日のやしろの意味について全く分かっていない。」という信仰世界の内側から声を発せればよいのである。

仮に、天理教の信仰を天理教学の前提条件とするのであれば、そのようなものとして天理教学を営む者も同様の声を上げなければならないはずだが、そのような声が上がったことはない。諸井の「2つの机」のエピソードが示すように、彼らは「教外」研究者による論考をおそらく全く異なる机の上でなされた研究と見なしてきたのではないか。天理教学がその形成過程において宗教学の影響下にあったことを考えると奇妙な問いかけではあるが、そのような(閉じた)天理教学は宗教学と再びの邂逅が可能なのかどうかを問わなければならない。それは、ネイティブ宗教学としての天理教学の構築に向けての問いでもある。

この事例は、「トランス」や「馮依」と呼ばれる現象を分析する心理学的、社会的ディスコースと言ってよいだろう。天理教を信仰する研究者も他の宗教を研究する際、これに類する宗教現象を同じ視点で分析するのであり、自ら信仰する宗教について同様の視点から解釈することが憚られるのであれば、それはどのような(信仰的ではなく)学問的な理由においてなのかを考える必要がある。

[註]

(1) 島園進(1977)「神がかりから救けまで—天理教の発生序説—」『駒沢大学仏教学部論集』8, pp.209-226.